

## オリバシオス『エウスタティオスのための梗概』

ギリシア語表題は"Synopsis pros Eustathion"、ラテン語では"Synopsis ad Eustathium filium"となっている。Oribasios ないし Oreibasios (ラテン語では Oribasius) はローマの貴族階級出身の医師で、A.D. 325 年頃にローマ世界最大の医師とされるガレノスの故郷ペルガモンで生まれたようである。アレクサンドリアに勉強した折に、やがてローマ皇帝となるユリアノス (在位 361-363) と知り合い、後に彼の侍医となった。同郷のガレノスの業績を顕彰し、ヒポクラテス医学の本領がガレノスによって発揮され、科学的医学が彼によって開基されたとした。オリバシオスはユリアノスの命を受けて『医学集成』(Iatrikai Synagogai) 全 70 巻を編纂した。これはクロトンのアルクマイオン (B.C. 500 年頃) から彼の同時代の医師までの所説を集大成した浩瀚な書であったが、25 巻しか現存していない。この大著を、医学を勉強している自身の息子エウスタティオスのために要約したのが、『エウスタティオスのための梗概』全 9 巻 (原著はギリシア語) で、ラテン語訳ではわざわざエウスタティオスの後に「息子」と入れてある。したがって、この書はいわば初学者向きで、そのためか外科学は専門学科として省略されており、体操、年齢に応じた食餌法、育児法、小児病の記述において比較的高く評価されている。4 世紀後半のローマ帝国では神秘主義の風潮が強くなっていたが、迷信的な療法の類は入っていない。

この『梗概』は完全な形で伝えられたのと、簡便なためか、古代ギリシア・ローマ医学がヨーロッパに流布したルネサンス期には広く注目されたようで、ラテン語訳の本書の出版は、1554 年である。ラテン語翻訳者としてイタリアのノヴァラ出身の医師でガレノス研究者でもあった Joannes Baptista Rasarrius (1517-1578) の名が見える。出版社はヴェネツィアの Aldus である。この出版社は印刷技術が普及し始めて間もなくイタリアの人文主義者の一人であった Aldo Manuzzi (1449/1450-1515) がヴェネツィアに創設したもので、優れた古典を相次いで刊行したことで知られている。ただしこの翻訳書の出版は刊行年から見て、Aldo の息子 Paulo の時代である。アルドゥスの出版した書物のシンボルが本書に見える、イルカの絡みついた錨で、いかにもヴェネツィアらしい。

本書は明治薬科大学で史学を担当していた岸本が古書店のカatalogで本書を見て、ギリシア・ローマの医学史を講義する際、資料の現物を手に取れば学生が歴史に関心を持ってくれるだろうと思い購入したが、退職に当たり、稀覯書として大学図書館に残すことにしたものである。

岸本良彦